

林業発達史調査会刊

(林業発達史料第三四号 永島福太郎著)

## 大阪木材市場史

津川正幸

戦後、山林或は林業について向けられた関心ないしは諸研究は、戦時戦後を通じて過伐・乱伐を続けて来たために森林資源に涸渇を招来し、それによつて惹起された幾多の水害によつてか、或は電源開発地として選定された奥地林業地帯が「湖底に沈む先祖伝来の地」とジャーナリズムに採上げられた為か、或は又一九四五年にはじまつた農地改革を契機として、改革が改革の名に価しなかつたとの見地より、農業経済学或は経済史学の部面より農地、林野の所有形態をめぐつての諸検討の一環としてか、によつて進められた。

これらの諸検討は、山林の解放が改革より除外されたということと、国土の七割を占める山林の大部分が、一部山林地主と政府によつて独占されているところが国の林野の所有構造の特殊性、すなわち農業構造の基礎としての土地所有状態が地的土地所有―封建的生産関係であるという基本的性格をなら変更したものではな

く、山林が改革より除外されたという事実によつて、いつそうかかる状態を激化したという見地に立つての検討であつて、従つてこれらに關する研究は、林業における生産関係部面に主として向けられ、流通ないし分配関係部面に向けられたものは極めて少ない。それだけに森林生産物の流通関係の領域における特殊研究の必要が痛感され、要望されるわけである。

このような折に、日本の林業発達に關して、史料或は諸研究の蒐集・発表に意を寄せ、江湖の要望に答えるべく漸次その成果の刊行を進めている林業発達史調査会において、林業発達史料第三四号として、永島福太郎氏の調査研究にかかる「大阪木材市場史」を得たことは林業の研究者のみならず、史学、経済学研究者にとつても喜びとしなければならぬ。

いうまでもなく永島氏は、「奈良文化の伝流」をはじめとし、「春日社記録」の校訂にもあたられ、その他、「近世封建社会成立過程の二三の考察」、「町方と地方」、「公事家老」等、大和をはじめとし畿内一円、紀伊・播磨等にわたつて地方の諸史実に造詣深く、困難な条件の下で封建社会に關する着実な研究を進めておられる学者であるが、その永島氏がさらにその研究領域をひろめられ、商業史の領域で、近世・近代・現代に至る周到な資料の蒐集・検討等の準備の上で得られた成果が、ここに紹介する「大阪木材市場史」である。

さて、本書は、林業の質的向上、量的増大の時間的变化を、「日本林業発達史の研究上かくことのできない個別的テーマ研究という観点」より、大阪を舞台とする木材商業―素材・製材の取引に關するもののみについて―の木材市場をよりどころとして展開され

た創設期より現在に至る迄の変遷過程を史的考察されたもので、本書の構成は三篇よりなつてゐる。

第一篇は大阪木材市場の系譜として、木材市場の成立と一木材間屋の生態を取扱い、近世における大阪木材商人の發展を木材市場機構の中における間屋・仲買組織の成立を通じて述べ、さらにかかる間屋仲買制の完成期における木材間屋の性格を、紀州新宮懸り間屋の例により、寛政二年から文化四年に至る間の現存する万苗帳にもとづいて、領主的商品経済下の領主に吸着する特権商人の間屋経営を、家族構成、営業形態、資本、及び独占排他的な株仲間組織の諸点より詳細に記述している。しかし第一篇は後続する近代・現代篇の序説的な意味でのべられたもので、研究の本論は第二篇以下にあるといわなければならない。

第二篇は近代大阪木材市場の發達と題し、明治維新の変革による市場組織の近代化という点より、間屋、仲買組合と公設木材市場の成立を述べ、その間の対抗關係を明らかにし、附売間屋の分立に至る過程に述べ及んでゐる。さらに以上の木材市場組織の近代化の胎動を、その取引機構を通して再検討し、「木材の商品性格の關係、伝統或いは資本の關係から、旧大間屋の後身である市売間屋を頂角とする市場の牢固さ」によつて、木材の需給量は増大し、市場圏も、中国、東南アジア、豪洲、北米等海外にも拡大されて行つたにもかかわらず、取引機構はわずかに修正されたのみで、市場の近代化は制約され、なおその中核には同族集团的組織を依然として持続し、株仲間に見られるような近世的な性格の根強よい残存の認められることを考察している。

続く第三篇は、大阪木材市場の現状について述べられたもので、

戦時統制時代の木材統制法、用材配給統制規則による木材統制会社の設立事情よりときおこし、戦後の復興用材、進駐軍用材等の需要激増、朝鮮事變の勃発等によつて惹起されたいわゆる木材ブームにのつて再発足し、しだいにその地歩を強化していつた大阪木材市場株式会社及び株式会社大阪木材相互市場の二市場を中心に、現在の会社組織と近代化された取引機構によつて経営される木材市場に於ける木材間屋の実態分析がなされている。なお第二篇以下の本論には詳細な図表が三図、二十六表にわたつて附され、繁雜な諸統計を或はグラフ表に、或は数表にして挿入し、実態變遷の理解に便ならしめてゐる。

さて、右のような内容の本書を通讀して感ずることは、前記した通り、今日経済史学においてとかく閑却視されがちな流通部門について、特殊なものであるけれども詳細な研究であることと、敘述に當つては、理論に走りかたよることなく、あくまでも史料に着実に立脚し、しかもこれを過大視することなく客観的に述べられていることで、永島氏の着実な研究態度がその文面に或は行間に窺い得るところである。

しかしながら「林業發達史の本稿に編成を見るまでには今後いくらの検討を経なければならぬ」とは、はしがきに記されているところであるが、批判ではなくなお希望したい点がないではない。しかし以下ここにのべる希望は、それに関する史料の存否さえも明らかでなく、むしろ永島氏自身がかかる史料の残存を渴望されたであろうと思われるところで、希望することが無理であろうかとも思われる。

何はともあれ、一二をあげると、新宮懸り間屋の進出を側面より

知るため、また大阪木材市場が他を圧して発展して行つた状態を知るために新宮熊野北山材の出荷状況、すなわち江戸積と大阪積の割合がどのようにあつたかを知らせる史料はないものか。また住吉講なる排他的な組織を結成するに至つた各木材問屋の延宝時の諸国懸り問屋の数においては、京・土佐等が紀伊問屋同様に多く、尾張問屋などは藩権力を背景に強引にのし上つたような例さえも見られるが、それぞれの間屋間の牽制・抑圧等が實際取引にどのようなあらわれたものであろうか。

また、近代・現代において市場にあつては、材質の確得は市場盛衰にかかると必要事であるが、戦後の木材市場再発足にあつても、奈良・和歌山・能代等の荷主の参加があつて全きを得た状態で、地方生産者・山元商人等との関係は、その後の地方集散地の市荒開始の増加と、「山元より消費者へ」の動きの顕著になり来つた今日、どのように推移して行つたものか。内地材の絶対量不足が認められる現況で単に金融面のみで集荷を有利に導いているものか。その間の状況と吉野・田辺・新宮・三重等の大阪周辺の地元問屋の大阪市場への進出状態が知りたいものである。

以上いささか自分自身の興味にひかれて、的はずれな紹介になつたが御許しを戴きたい。なお私的な文通による消息になるが、最近永島氏は大阪木材問屋の史料を入手され、これが臆刻に當つておられる由で、後日なおこの好著に錦上添花を添えられるの結果が得られるであろうことを期待し、僭越ながら木材問屋関係史料の所在を御承知の向があれば、永島氏に御一報の上この研究のいつその進行に御助力下さらんことを御願する次第である。(林業発達史調査会刊、非売品)

(本学経済学部助手)

阪口 保 著

## 浦島説話の研究

大原 輝 代

古代から現代に至るまで親しまれている説話として、浦島伝説がある。それが万葉集のように抒情的な見方と、丹後風土記のように敘事的な見方との両方から出発して、私達が子供のころに聞いたあのなつかしい童話になるまで、また天智治のあの妖しいまでに美しい文学になるまでには、一体どのような経路をたどつてきたのであろうか。日本人の誰もが深い興味をいだくであろうこの問題について、詳しく資料をあげて説き明かされたのが、神戸外国語大学教授阪口保氏の新著「浦島説話の研究」である。

本書は浦島伝説の説話史のようなものであつて、いま章ごとに批評紹介することは到底できそうにもないので、ただ不十分ながらも著者の云われる浦島説話展開の跡を紹介してみようと思う。

浦島説話が、ほぼその全き形をもつて、わが古文献に最初に現われるのは万葉集であつて、それはもと日下部氏が、自己の出自を誇る神話として伝承し来つたものが、奈良朝に至つて、丹後国住吉地方の伝説として、万葉集の特異な敘事歌人高橋虫麻呂によつて、一篇の長歌並びに短歌に詠い上げられたものといふことになるが、これに日本書紀雄略天皇二十二年の大亀の条を加えると、その時代に